

「おはよ〜、小夜」
「おはよう、姉さん」

とある一軒家の中で、姉妹が朝の挨拶を交わしていた。
姉の名前は柊 真琴（ひいらぎ まこと）。
端正な顔立ちと吊り上がった鋭い目つきが特徴的で、誰もが美人と評する、近所の高校に通っている高校二年生の少女だ。
髪は金髪に染めてあり、腰まで届くストレート。身長は女子高校生にしては高く、165cmはある。

「ふわぁ〜〜……」

真琴は頭をポリポリと搔きながら欠伸していた。
寝起きであるためか、長い髪はいくつか跳ねてだらしく見え、まだ眠いのか、眠気眼である。
そんな彼女は水色一色の寝間着を着ており、上から3つ目までのボタンは外され、そこから豊満な乳房から生まれるI字型の谷間が覗いていた。

そして、妹の名前は小夜（さよ）。
真琴と同じ高校に通う、高校一年生の少女だ。
姉妹だからか真琴に似た端正な顔つきをしている。しかし、こちらは小顔で可愛らしさが特徴的だ。髪は艶やかな黒髪で、背中の中ほどまで伸びている。
体型は姉に似なかったのか、身長は145cm程と低く、胸の発育も姉の3分の1程で、姉が美人と評されるなら、小夜は顔の可愛らしさも相まって愛玩動物のような可愛さがあり、美少女と周りからは評されている。
真琴とは違い寝起きであるにも関わらず、ピンク一色の寝間着をしっかりと着ており、髪に跳ねなどの乱れはなく、目をしっかりと開き、眠気などは一切感じられない。

「姉さん。今日は学校に行くの?」
「いや、気になることがあるから町をぶらつくわ」

ぶっきらぼうな口調で真琴は小夜にそう言う。
真琴は学校をさぼるようだが、そのことに対して小夜は何も言わなかった。
もしかしたら、真琴が学校をさぼることは日常茶飯事かもしれない。
その後、二人は他愛のない会話をしながら洗面台に行き、顔を洗った。
朝食を食べ、それぞれの部屋に戻り、小夜は制服に、真琴も学校には行くつもりがないが制服に着替えた。
真琴は黄色のパーカーの両袖を結び腰に巻き、制服のスカートは瑞々しい太股が大胆に見えるほど短く改造してある。
腰まで届く髪をポニーテールにし、窮屈であるのか、谷間が見えるくらいに胸のボタンを開け、校則などお構いなしな格好だ。
反対に小夜はしっかりと制服を着ており、可愛らしい雰囲気の中に、制服を着ることで凛とした雰囲気も感じられるようになっている。
髪はそのまま、スカートから微かに見える足は華奢であり、絹のような滑らかさを感じられる。

「途中まで送ってく」
「うん」

二人は同時に家を出た。

「もう9月も終わりだなあ」

へへっと笑って、真琴は小夜の頭をポンポンと優しく叩いた。

小夜は学校では超優等生として有名だった。それは学業だけでなく、彼女自身の能力の高さも評価されている。

小夜は、とある理由のために生徒会長になりたかったが、二人が通っている高校では一年生は生徒会長になれない規則があった。

しかし、先生たちが小夜の能力の高さ、人望を買い、さらには本人の熱意に押され、特例として生徒会長選挙に立候補することを許可した。

それが決まったのは夏休みに入る前、7月の出来事。

夏休みに入ると小夜は公約、スピーチの内容、ポスター作成を友人たちと共に行い、夏休みが終わると彼女達と一緒に生徒会長選挙の活動を始めた。

朝早くから登校し、学校の掃除、登校した生徒に挨拶は欠かさない、授業が始まると率先して発言する。

授業が終わると、分からないことを聞きに来る友人達の相手をし、下校するときも疲れを見せない可愛らしい笑顔で挨拶をする。

品性高潔、それでいて孤高ではなく休み時間や下校時は友人と談笑したり、遊んだりして友好を深め、交友関係のある人たちからは非常に好かれている。

そんな真面目で優等生で、友好関係が広い小夜に絡む連中も出てくる。

校則違反者には注意をし、可愛らしい見た目で、嫉妬を買いやすく、大声で怒鳴られたり、影口をたたく生徒もいる。

しかし、彼女の可愛らしい見た目に騙されるかもしれないが、小夜は見た目通りの少女ではない。

決して弱いところを見せない。芯がとても強く、気丈な少女だ。

小夜に絡んだ者はことごとく、逃げ道のない正論の言葉の嵐にボコボコにされ、意気消沈して帰っていく。

そして、2、3日後には何故か、青あざだらけの状態で登校してくる。

そうしたことが2度、3度起こると、誰も小夜に対して悪意をぶつけてこなくなった。

その裏にはとある人物がいることを小夜は知っているが、口出しはしなかった。

それが間違ったことだとしても、そこには自身に向けられる愛情があることを知っているから。

小夜は最愛の人物だけには甘かった。

「さーて。私はここで分かれるぜ」
「うん。またね、姉さん」
「おう、勉強頑張れよ」

真琴と小夜は分かれ道で分かれ、真琴は町に、小夜は学校に向かった。

[illegible]

真琴たちが住む町、雨宮町は都会とは言えない町で、いくつかの不良グループが存在する町だ。

女子高生が昼間であっても一人で歩いていれば、不良に絡まれるくらいには治安が悪い。そんな町を、真琴は小夜と別れた後、1人でアスファルトの歩行者用の道を歩いていた。正面からは男子生徒が歩いて来ている。

おそらく登校中の学生だろうが、彼の口と耳にはピアスを付け、制服も改造が施してあり、いかにも不良といった感じだ。

「おい」

真琴はその不良と思われる男子学生に声をかけた。
綺麗な声ではあるが、ドスの効いた声で。

「来やがったな」

「へえ。私が来るって分かってたのか」

「ああ。てめえの噂は聞いているぜ。妹を守るナイト様よお」

この男子生徒は校則違反であるピアスを付け、昨日それを取り締まろうとした小夜を大声で怒鳴り散らし、騒ぎに気付いた先生が走って近づいて来ていることに気付いて逃げた生徒だった。

そしてその男は真琴の噂を知っていた。この町の住民ならば誰でも知っている噂だ。

「終真琴には手を出してはならない。もし手を出したとき、そいつは必ず再起不能になる」

真琴も不良にカテゴライズされている人間で、この町では有名な不良だった。

校則破りは当たり前。勉強もろくにせず、気が向いたときにしか登校しない。

さらには男勝りな性格で、口調も荒い。

そして真琴は女であるにも関わらず、喧嘩がめっぽう強い。

恰幅のいい男性を拳一つで卒倒させ、複数の人間を相手にしても負けたことはなく、彼女1人で30人程の不良グループを壊滅させたのはもはや伝説であった。

不良である真琴が暴力を振るう時は2つある。

1つは自身に迫りくる暴力を潰す時。

2つは妹の小夜に危害を加える存在を痛めつける時。

小夜に絡んでいた生徒たちをボコボコにしたのは真琴だった。

ちょっと絡む程度であるなら真琴は何もしない。

しかし、小夜に何かしらの危害を加える発言、計画を立てた者には容赦がなかった。

そうしていつしか小夜に危害を加える存在はいなくなったのだが.....。

久方ぶりに小夜に危害を加えようとしていた人間が現れた。

それがこの男子生徒。

男子生徒としては真琴が喧嘩に強いことは知っており、複数人の不良たちを倒したことも知っていた。

だから男子生徒は一人ではなく、仲間を引き連れていた。

「30人のグループを壊滅させたことがあるんだってな。その時はたかが不良だったんだろうが.....。見ろっ！ アマチュアのボクサーに柔道4段、他にも経験者共を集めた」

男子生徒は30人の仲間を引き連れていた。

その中には不良だけでなく、見るからに屈強な男がちらほらと混じっており、彼の言うことが本当ならば、彼らは様々な格闘系スポーツの経験者や有段者らしい。

彼らを率いている男子生徒はニヤニヤと笑いながら、真琴を挑発する。

「流石のお前でも、コイツ等には絶対勝てねえぜ。どうだ？ 俺のセフレになるっていうなら勘弁してやるぜ?」

「フッ.....。お前のインポじゃ満足できねえよ」

売り言葉に買い言葉。

真琴は馬鹿にしたような顔で鼻で笑って、男子生徒を挑発した。

「吠え面をかくなよ。てめえをボコボコにした次は妹だ。あの可愛い顔をぐちゃぐちゃにし

て犯してやるよ」
「ハア……」

男子生徒の言葉に真琴はため息をついた。
それは呆れだけではなかった。
グツグツと煮えたぎるマグマのような怒りを押さえつけるためのため息でもあった。

「ったく。ちょっとボコすだけにしてやろうと思ってたのになあ。半殺し確定だな、こりや」

真琴は準備運動をするかのように拳をボキボキと鳴らしながら、男子生徒たちに近づいていく。

「おい、お前ら」

真琴は静かにそう言い、

「覚悟はできてるんだろぅなアアアアアアツツツ！！！！」

怒号を言い放ちながら男子生徒たちに突っ込んでいった。

[illegible]

「おい。もう二度と小夜に手を出すなよ」

真琴は仰向けに倒れている男子生徒の腹部にまたがり、胸倉を掴んでそう言った。周りには死屍累々と言わんばかりに男たちが倒れ伏している。これまでの時間はたったの5分だった。

「わ、分かった。もう二度と手は出さねえよお……」

男子生徒は顔をパンパンに腫れさせ、震えた声で真琴に返事をする。

「オラッ！……フン」

真琴はトドメとばかりに男子生徒に強烈なパンチ一発を浴びせ、立ち上がり、その場を去った。

(さてと、とんだ邪魔が入ったが……、唐揚げ屋のばあちゃんの所に行くか)

歩きながら真琴は行くべき場所を思い浮かべる。
彼女が向かう場所は昔から世話になっている唐揚げ屋であり、地元では結構有名な店で、一人の老婆が切り盛りして営んでいる。
数日前、久しぶりに唐揚げ屋に訪れると、老婆はここ最近ヤクザのような人たちに金を払えと脅されているという。
次に集金に来るときに金を用意しておけと言われ、用意していた時に真琴が丁度やってきた。
老婆から話を聞いた真琴は警察に知らせるように言ったが、連絡はすでにしてあり、なぜか警察は取り合ってくれなかったという。
さらに詳しく聞くと、どうやら被害にあっているのは老婆の唐揚げ屋だけでなく、町全体で

起こっているらしい。

（どっかからヤクザが流れ込んできたのか？ 警察はすでにヤクザに買収されている？ 考えたらキリがないが……。何か嫌な感じだぜ）

そうこう考えているうちに、唐揚げ屋に到着した。
どうやら相手はまだ到着していないらしい。

「よっ、ばあちゃん」
「ああ、真琴ちゃん。来てくれたのかい？」
「当たり前だろ？」

店の中には朗らかな笑みを浮かべている老婆がいた。
優しい雰囲気醸し出しているが、どこか不安そうだ。

「そろそろあいつらが来る時間だよな？」
「そうだよ。なあ、真琴ちゃん。本当に大丈夫なのかい」
「大丈夫だよ、ばあちゃん。警察が役に立たないんだ。ここは私に任せて、ばあちゃんは中に居てくれ」
「危なくなったら逃げるんだよ。わたしゃもう年だし、この際どうなっても……」
「いいから、いいから」

心配する老婆の背中を押して、店に押し込んだ後、店の出入口のすぐ傍で立って待つ。
すると10分後くらいに黒スーツを着た男が三人やって来て、店の中に入ろうとすると、スツと真琴は動き、入り口を断ち塞ぐ。

「おっと、待ちな。あんたら、この店に何の用なんだ？」
「君には関係ないだろう？ そこをどきなさい」

三人の中で中央にいた男が丁寧な口調で、けれどどこか苛ついているような声で真琴の問いかけに応えた。

「どかねえよ。……なあ、お前達はよお。まさかこの店から金を筆り取ろう……。なんてことを考えていないだろうな？」

ギロリと元から鋭い目つきをさらに鋭くさせて、真琴は男達を睨んだ。

「筆り取る？ 私たちはただ町の治安を守るための費用を貰おうとしているだけです」
「ふざけるなよ。あんたらにそんな権限はないはずだ」

真琴が語気を強めて、男たちにそう言い放つ。

「ハァ……。いい加減にしろよガキ。怪我したくなかったらそこをどきな」

ため息をついた後、男の態度が急変。ドスの利いた声で真琴を脅し始めた。

「今までの紳士的な態度は何処にいったんだ？ あんたらこそ、ここから……。この町から出ていきな」

男は意地でも通さない、という強い意志を真琴から感じ取り、仕方なしという態度で次の行動をとる。

「どうやら痛い目に合わないとは分からないようだな。おい」
「「へい」」

真琴と話していた男が後ろに控える2人の男に声をかける。

「このガキに大人に逆らうとどうなるか教えてやれ」
「まあ、待てよ。始める前に聞かせてくれよ。あんたたちはヤクザなのか？」
「そうだ。分かったらそこをどけ。怪我をしたくはないだろう」
「ふっ、そうだなあ……どけねえなッ!」
「ガッ!!」

真琴は今まで話していた男の頬に拳を一発お見舞する。
男は2 m程吹っ飛び、地面に倒れこむ。

「てめえッ!!」
「本物のヤクザ相手か。面白くなってきたぜえッ!!」

後ろに控えていた男たちが同時に襲いかかってきた。
そうして真琴とヤクザとの喧嘩が始まったが、決着は直ぐに着いた。

「ウァ……アァ……」
「オ……ウゥ……」

後ろに控えていた男たちは倒れ、うめき声を上げている。
そして最初に真琴に殴られた男は、真琴に胸倉を掴まれ、立たされていた。

「おい。他にも仲間はあるのか。お前がリーダーなのか。答えろ」
「テメェ……。こんな……こんな事してただで、ぐうっ! 済むと思うなよ……」
「いいから質問に答えろ」
「……知らねえな」
「チッ」

男が絶対に情報を喋らないと悟った真琴は掴んでいた男を離し、地面に落とし、鳩尾に踵で一撃を与え、警察に連絡をした。

(ここまですれば見て見ぬふりはしないだろ)

真琴は老婆にもう男たちは来ないことを話して、唐揚げ屋を去った。
そして町をぶらぶらと探索する。

(他に仲間がいそうだし、大本を潰さないと意味がないよな。……あいつに電話するか)

真琴はズボンのポケットからスマホを取り出し、とある人物に電話する。

「1つ調べてほしいことがあるんだが」
「……任せて」

相手の声は無感情な、淡々とした声色でどこか幼い。
恐らく、真琴の同じ年齢か、年下だろう。

「この周辺のヤクザの事務所を調べてほしい。近い所から教えてくれ」
「……10分後にメールする」

「おう」

電話の相手は中学生の頃、イジメられていたところを真琴が助けた、綾波 灯（あやなみ あかり）という少女で、真琴と同じ年齢だ。

とてつもなく可愛い顔立ちをしているが、身長は130cmと低く、顔には表情が浮かばない。声も淡々としており、まるで機械のようであり、社交性もなかったためにクラスでどんどん孤立し、いつしかイジメられるようになった。

そこに助けに入ったのが真琴で、灯は真琴を慕うようになった。

彼女はPC関連に強く、今現在は親が富豪であったために高校へ行かずに不自由なく家で暮らしており、ハッカーとして様々な企業や機関の情報を抜き取って生計を立てている。

今やその腕前は、才能があったのか、超一流で、真琴が自身の力で調べられない情報を手に入れる時の協力者だ。

電話を切り、10分経つと住所が14個書かれたメールが送られてきた。

「ヨーシャッ! 一つずつ潰していくか!!」

こうして真琴によるヤクザ狩りが始まったのであった。